

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 12 日現在

機関番号：17401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24560646

研究課題名(和文) 歴史と文化を活かした川まちづくりのための地域マネジメント手法の開発

研究課題名(英文) Study on the development of regional management method for kawa-machizukuri based on history and culture

研究代表者

田中 尚人 (TANAKA, Naoto)

熊本大学・政策創造研究教育センター・准教授

研究者番号：60311742

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、地域の歴史と文化を活かした川まちづくりを実践するための、地域マネジメント手法を開発することを目的とした。具体的には、まず、国内の先進事例を対象に、都市内の水辺における地域社会の協働プロセス及び水辺の土木遺産及び文化的景観の保全・活用手法に関する調査・分析を行った。次に、川まちづくりに係る複雑な水辺の事象・活動及び協働プロセスを読み解き、川まちづくりや地域防災の基盤となる自治システムの構築に至る地域マネジメント手法を開発した。

研究成果の概要(英文)：In this study, it is the purpose that develop area management method for a kawa-machizukuri based on the local history. Specifically, at first the study about collaboration process of the community in the waterfront of the city and an investigation about maintenance, the utilization technique of the engineering works inheritance of the waterfront and the cultural landscape analyzed it for domestic advanced examples. Then, It were analyzed that a phenomenon, an activity of the complicated waterfront, and modified making it and a collaboration process and untied it and developed area management method for waterfront. Finally, the autonomy system was developed to reach a base of the area disaster prevention and the construction of the autonomy system.

研究分野：土木史，景観論

キーワード：川まちづくり 自治 水辺 土木史 景観デザイン 多様性

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 平成 16 年に景観法が公布されて以来、平成 17 年文化財保護法改正により文化的景観の規定が盛り込まれ、平成 20 年地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）の制定など、地域の歴史や文化を基盤に据えた都市整備、地域づくりが重要視されてきた。景観法では、重要景観公共施設など、都市基盤施設が地域景観に及ぼす影響の大きさも認識され、その役割の大きさが指摘されてきた。新谷らは、『歴史を未来につなぐまちづくり・みちづくり』<sup>1</sup>の中で、歴史的環境保全と都市基盤整備は必ずしも対立しないと述べており、これはみちづくりのみならず、川づくりにも言えることである。

(2) 都市内の河川や湖沼などの水辺は、地域住民の生活環境として貴重な自然であり、様々な機能を有するオープンスペースである。川づくりの分野では、親水やアメニティが謳われ、1990 年代より多自然（型）川づくりが取り込まれてきた。近年、環境や生物多様性の重要性が指摘される一方で、都市内の水辺では地域住民と行政の協働によるまちづくりとの連携が求められ、水辺を基盤としたまちづくり、つまり「川まちづくり」が提唱されるに至っている。川づくりが、単に河道内の治水や利水に終始した事業ではなく、まちづくりの核となりうることは、樋口らが著書『川づくりをまちづくりに』<sup>2</sup>において現地を一つ一つ丁寧に訪ね明らかにしている。申請者らは、平成 17 年度より熊本大学政策創造研究教育センターの支援事業であるサイエンスショップ型研究として、坪井川の川まちづくりの研究及び実践に取り組んできた。その中で、川まちづくりの要素として、環境・防災・観光が重要である、という視座を得た。

(3) 人間ばかりでなく他の生物や自然環境をも含んだ川まちづくりに、地域の歴史や文化を活かすためには、地域コミュニティの成熟、地域アイデンティティの醸成などが必要不可欠である。その時、地域にとって最も重要なことが、コミュニティの構成員による「自治」の実現であると言える。かつて、道普請、川浚えなど、地域コミュニティによる土木施設の計画・設計・施工、維持・管理は、地域の「役」としての活動であった。地域マネジメントにとって、土木技術や土木構造物そのもの、またそれらを核とした地域環境の歴史が重要な意味を持っていると言える。

(4) 世界一の観光立国であり一次産業を基盤とした地方分権が進むフランスでは、地域住民の生活と来訪者の観光・ツーリズムを両立させている。特に都市部では、舟運システムを公共交通と組み合わせて地域振興、観光に

役立てている。パリ（Paris）のサン・マルタン（St.Martin）運河周辺における産業観光及び市街地再開発事業や、ストラスブール（Strasbourg）の世界遺産<sup>3</sup>ともなっているグランディル（Grand Île）周辺の観光舟運とトラムの連携、などが有名である。施設整備を含め、これら舟運システムの運営には、地域住民と基礎自治体の協働が不可欠なものとなっている。

## 2. 研究の目的

本研究では、地域の歴史と文化を活かした川まちづくりを実践するための、地域マネジメント手法を開発することを目的とする。具体的には、まず、国内の先進事例を対象に、都市内の水辺における地域社会の協働プロセス及び水辺の土木遺産及び文化的景観の保全・活用手法に関する調査・分析を行う。次に、川まちづくりに係る複雑な水辺の事象・活動及び協働プロセスを読み解き、川まちづくりや地域防災の基盤となる自治システムの構築に至る地域マネジメント手法を開発する。さらには、城下町を起源とする熊本市の中心市街地を流れる坪井川の川まちづくりに対して、開発した地域マネジメント手法を適用し、その検証を行う。

## 3. 研究の方法

### (1) 都市内の水辺における地域社会の協働プロセスの調査・分析

本研究では、川まちづくりの先進事例と言われる、広島県広島市、福岡県柳川市を対象地とした。広島市は、「水の都ひろしま - 水の都整備構想：建設省（当時）・広島県・広島市」を基盤として、様々な水辺の市民活動を展開してきた。その中でも、かつては水辺の各戸にあったと言われる雁木（階段護岸）を活用した「雁木タクシー」と呼ばれる水上タクシーを NPO 組織が運営しており、その評価が高い。柳川市は、かつて水質の悪化した城下町の堀割の埋め立てを、一行政マンの活動から回避した歴史を持つ。堀割は、干満差の大きな有明海沿岸の水辺において、貴重な都市用水を確保するために近世に整備された貴重な土木遺産である。この堀割の水質浄化が契機となり、水辺を基軸としたまちづくりが始まり、現在柳川「川下り」は堀割にたくさんの観光客を誘っている。両地域の水辺の地域社会の協働プロセスを、グループ・ダイナミックス<sup>4</sup>的手法によって記述し年表を作成する（そのため、国内調査旅費を計上）。グループ・ダイナミックスは、社会的な事象や人々の活動を、環境の総体（集合体）が織りなす動態（集合流）として捉える社会心理学的手法である。本研究では、それぞれの活動の変化点に着目し、主体間の関係性を分析する。

(2) 水辺の土木遺産及び文化的景観の保全・活用手法の調査・分析

広島市では雁木と呼ばれる階段状の石積み護岸と河畔林，柳川市では堀割の石積み護岸及び水門などの水位調節施設などの土木遺産が存在する．さらに，水辺の文化的景観の事例として四万十川流域を調査対象とする．これらは，一つ一つの構造物（文化財）というよりは，群として，システムとして機能する土木構造物（土木遺産<sup>5</sup>）の価値，その保全・活用を検討するのに適した事例といえる．本研究では，これら水辺の土木遺産・文化的景観のデータベースを構築し，さらにこれらの保全・活用手法，地域社会（管理者のみならず，自治体や地域住民）の関与，川まちづくりにおける位置づけに焦点を当て，分析を行う．

(3) 川まちづくりの主体となる自治システムの構築・検証

以上の調査内容を踏まえ，広島市の事例分析を中心に，川まちづくりや防災の基盤となる自治システムの構築手法を開発する．地域自治の規範は，地域アイデンティティであり，行政，地域住民からなる地域社会が，自らの生活環境であるインフラストラクチャーのかたちや機能をよく認識し，維持・管理の主体となることが望ましい．先進事例の川まちづくりにおける，各主体の協働過程において，「引継ぎ」や「合意形成」などのプロセスにおける「動態」を丁寧に分析することで，行政，地域住民，NPOなどの第三極それぞれの行動規範，道具（ツール），仕組み（ルール）のつくり方，育て方の行動方針を記述する．土木遺産は，これら川まちづくりにおける様々な主体の行動を支え，行動同士の結びつき，つまり集合流をも支えることになる．各主体の活動を整理した後，それらの活動，環境の集合体として，川まちづくりを定式化し，そのマネジメント手法を組み立てる．

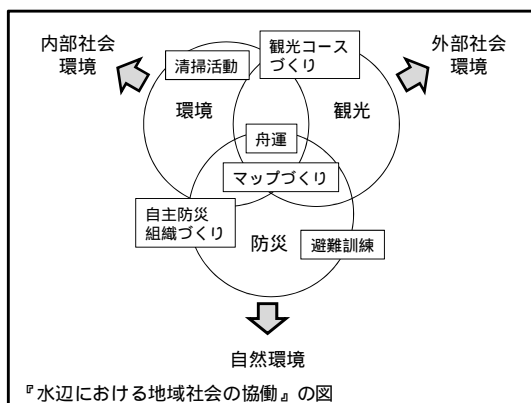


図1 水辺における地域社会の協働の図

#### 4. 研究成果

(1) 元安川親水テラス（図2）

日常・非日常：元安川右岸に設けられた親

水テラスは後背に平和公園，対岸に原爆ドームという位置に設けられている．観光客が多く，人々の往来の激しいエリアとなっている．元安川親水テラスにおける非日常的なアクティビティとしてはNPO法人雁木組が運営する小型船舶を用いた「雁木タクシー」，8月6日の広島平和記念日に行われる「とうろう流し」，一大イベントとなっている「水辺のコンサート」が挙げられた．また，日常的なアクティビティとしては，「水辺での休憩」，「階段護岸に腰かける」，「散歩」といったアクティビティがみられた．

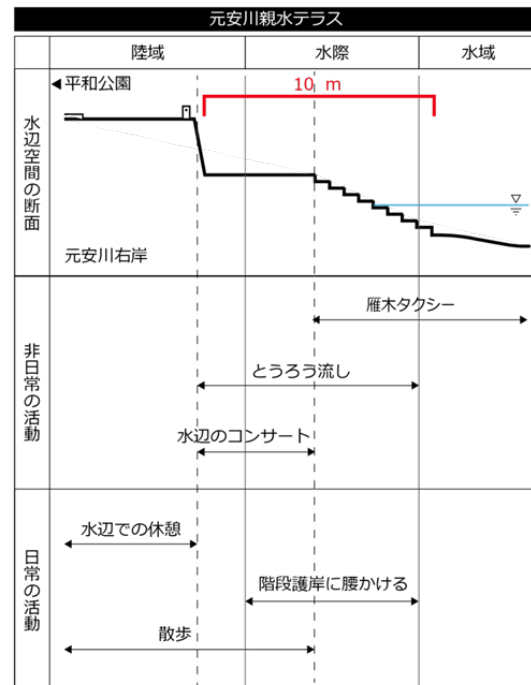


図2 元安川親水テラスの断面分析

活動の展開場所：図2を見ると水域から陸域まで広く使われている．親水テラスは幅15m，奥行き4mの平面部が設けられている．雁木タクシーでは平面部で乗船の受付や準備を行い，階段を利用して船に乗り込む．このため階段は船に乗り込むための棧橋として機能している．

灯籠流しでは，階段を利用して人々が水面に灯籠を浮かべるため，階段が水面へのアプローチとして機能している．階段の横幅が広いと，多くの人が一度に水面に近づくことができるという利点がある．

平面部をステージとして活用しているのが例年開催されている水辺のコンサートである．水の都ひろしま構想における「(1)水辺を晴れの舞台にしよう」の取り組みとして行っているもので，平成16年から開催されている．

日常的なアクティビティに注目すると，親水テラスの階段部に腰掛けて休憩する姿やお弁当を広げ昼食をとる姿が見られた．また，原爆ドームの対岸に位置するという立地から写真を撮るための視点場として機能している様子もみられた．

関係する主体：元安川親水テラスはNPO法人雁木組が運行する水上タクシー「雁木タクシー」が最もよく利用する乗降場であり、休日はここを拠点としている。発着所として利用され、平和公園や原爆ドームを訪れた観光客も多く利用していた。雁木組は水辺を豊かに利用してきた歴史を雁木に見だし、雁木を現代においても活用しようとしている地元のNPO法人である。平和公園を出発し基町環境護岸の前を通過し本川と天満川の分流付近で折り返し帰ってくるコースを基本的に運行を行っている。ここに関わっている主体としてはNPO法人雁木組、雁木タクシーの利用客が挙げられる。NPO法人雁木組が広島市民で構成され、元安川親水テラスにおいて雁木タクシーは観光的運営が行われていることから、地域住民と観光客といった主体間の関係が読み取れる。

灯籠流しに注目してみると、関係する主体としては実行委員会、ボランティア、灯籠を流す遺族、灯籠流しを眺める観光客が挙げられる。鎮魂の意味を持つ行事だが観光地となっていることから、観光的な注目度も高い。そのため主体間の関係としては市民と観光客といった構図が読み取れる。

## (2) 基町環境護岸

日常・非日常：基町環境護岸では多様なアクティビティを確認することができた。非日常的なアクティビティはどれも個性的なものであり、他の区間のアクティビティとは異なっている。空鞆橋より上流区間のうち、ニセアカシアの木からポプラの木の間の空間ではオープンスペースを活用してイベントが開催されていた。イベントの例としては銀幕を屋外に設置し、芝生を観客席とした「野外上映会」や農産物や工芸品など、手作り本人が持ち寄って開催される green grand market というマルシェの開催などがある。また、過去には水辺空間を結婚式場としてしつらえ、「水辺の結婚式」が行われたこともあった。さらにポプラの木を見守るべく設立されたNPO法人「ポップラペアレンツクラブ」によって草刈りや清掃活動も行われている。小学生の環境学習の場として、水質実験やカヌー体験、水辺の風景の写生といった「水の環境学習」も行われていた。

日常利用に着目すると、一帯に整備された芝生を利用して、直接座って休憩する姿や傾斜を利用して寝転がる人などの姿がみられた。また空鞆橋より下流の空間は石畳が整備されているため平面が多く設けられており、バーベキューをする人々の姿も見られた。

活動の展開場所：アクティビティが行われる中心は河岸緑地であるといえる。野外上映会では、銀幕が設置され、その前面に観客席、観客席の後ろには出店が並ぶなど、広いスペースを必要とする。また、水辺の結婚式に注目すると、歩道から河岸緑地、雁木、さらに水面にまで活動域が達している。河岸緑地上

の歩道から入場し、式場として設えられた緑地での式、そして川側に退場するといった一連の流れがあることからこのような活動域となっている。式場とするだけの広いスペースがあったこと、川に退場するため、雁木タクシーに乗船するための雁木が設けられていたことなどがこのようなアクティビティを実現する要因となっていることが分かった。野外上映会、水辺の結婚式、水の環境教育、マルシェ、草刈り、寝転がるなどのアクティビティは広い面積をもち、一体に芝生が整備された河岸緑地であるがゆえのアクティビティだといえるだろう。

関係する主体：「野外上映会」に着目してみると、野外上映会に関わる主体はポップラペアレンツクラブ、映画を観賞する人々が挙げられる。野外上映会において重要なのはポプラの木とニセアカシアの木の間の広い芝生のスペースである。このスペースにスクリーン、観客席、受付、出店といったすべての機能が展開され、映画を見に来た人は自分の好きな場所に陣取り出店で買った料理や飲み物などを広げて好きなように楽しんでいた。主体間の関係としてはいずれも市民であり、自分たち自身が水辺空間を楽しむ様子がかがえる。また、同じ空間で活動している別の主体がアクティビティを通してつながっていった例もあった。野外上映会やggmは同じ空間で展開されているが活動の主体が異なる。しかしお互いに水辺を活用する立場としてつながりを深めていっている。

日常利用を見てみても、散歩の途中で芝生に座り休憩したり、寝転んだりするのは市民であり、基町環境護岸には水辺空間を市民が楽しんでいる状況を把握した。

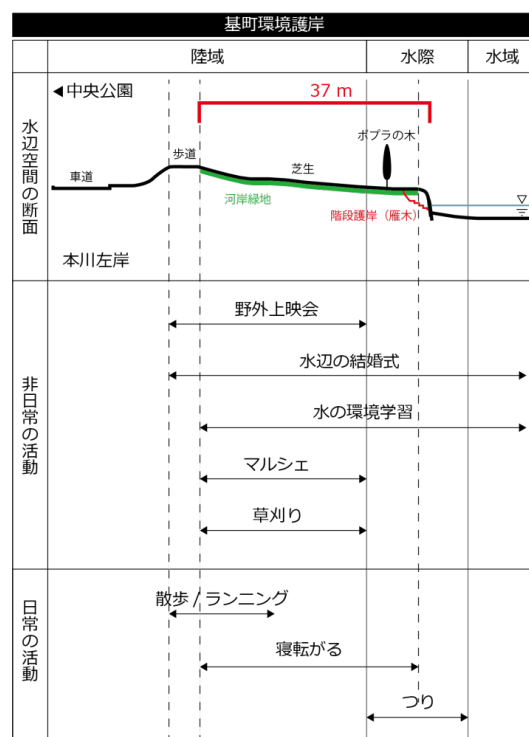


図3 基町環境護岸の断面分析

ここでは、紙面上2つの水辺空間のみ表示したが、元安川親水テラスは平和の水辺として位置づけられ、観光客との関わりが深い。基町環境は広大な芝生空間で多様なアクティビティが展開されている。これらのアクティビティは市民の工夫によって起こされているものが多い。京橋川ばた通りでは、昼時の水辺の利用など、市民の憩いの場として利用されている。猿猴川アートプロムナードでのアクティビティは少ないが、地元の祭りの会場で利用されるなど、地域にとって必要な空間である。各水辺空間はそれぞれ利用されており、それぞれの空間ごとに役割を持っていることがわかった。

#### <参考・引用文献>

- 1 新谷洋二編著・久保田尚、矢野和之ら著・社団法人日本交通計画協会編著協力、歴史を未来につなぐまちづくり・みちづくり、学芸出版社、(2006)。
- 2 樋口明彦+川からのまちづくり研究会著、協力=財団法人福岡県建設技術情報センター、学芸出版社、(2003)。
- 3 世界遺産、D・オールドリ/R・スシエ/L・ヴィラール著、水嶋英治訳、白水社、(2005)。
- 4 杉万俊夫編著、コミュニティのグループ・ダイナミクス、京都大学出版会、(2006)。
- 5 土木学会土木史研究委員会編、日本の近代土木遺産 現存する重要な土木構造物 2800 選 [改訂版]、社団法人土木学会、(2005)。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### [雑誌論文](計4件)

1. 中村康佑・田中尚人・岩田圭佑、広島横川の水辺に着目した都市形成に関する研究、平成 24 年度土木学会西部支部研究発表会講演集、査読なし、2013.3.
2. 岩田圭佑・田中尚人、川まちづくりにおける地域社会の協働過程に関する研究、熊本大学政策研究、第4号、pp.61-70、ISSN 2185-985X、査読なし、2013.4.
3. 田中尚人・中村康佑、広島川の川まちづくりを支える土木遺産の価値構造に関する研究、土木史研究講演集、Vol.34、pp.101-104、査読なし、2014.6.
4. 中村康佑・田中尚人、広島デルタの川まちづくりにおける水辺空間の特性に関する分析、平成 26 年度土木学会西部支部研究発表会講演集、査読なし、2015.3.

##### [学会発表](計3件)

1. 中村康佑・田中尚人・岩田圭佑、広島横川の水辺に着目した都市形成に関する研究、平成 24 年度土木学会西部支部研究発表会、

2013.3.

2. 田中尚人・中村康佑、広島川の川まちづくりを支える土木遺産の価値構造に関する研究、土木史研究発表会、2014.6.
3. 中村康佑・田中尚人、広島デルタの川まちづくりにおける水辺空間の特性に関する分析、平成 26 年度土木学会西部支部研究発表会、2015.3.

##### [その他]

- ・ 広島県の雁木と川まちづくりに関するミニシンポジウム報告書 2013、熊本大学政策創造研究教育センター、2013.6.
- ・ 広島県の川まちづくりを考えるワークショップ&シンポジウム報告書 2014、熊本大学政策創造研究教育センター、2014.7.

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

田中 尚人 (TANAKA, Naoto)  
熊本大学・政策創造研究教育センター・  
准教授  
研究者番号：60311742

##### (4) 研究協力者

シリル・マルラン (MARLIN, Cyrille)  
Ecole National Superior Architect and  
Paysage Bordeaux・准教授